

日本アディクション看護学会 News Letter 第22号

2013年12月20日 発行

日本アディクション看護学会事務局

日本アディクション看護学会 第12回学術集会を終えて
第12回学術大会大会長 刀根 洋子(目白大学看護学部教授)

2013年9月28日29日の両日、第12回アディクション看護学会学術大会を埼玉県和光市の目白大学国立埼玉病院キャンパスで開催致しました。9月は台風の季節で、開催日が近くなると実行委員皆で天候を気にしていましたが、当日は2日間とも秋空が広がり、爽やかな風が吹き渡る中で開催することができました。当日ご参加いただいた180名近くの皆様に感謝申し上げます。

1年半ほど前から準備がはじまりましたが、大会事務局は母子研究室ということでアディクション関係の人脈も少なく、埼玉県内の東都医療大、埼玉県立大の先生方のお力をお借りすることで、シンポジウム、交流集会の企画もスムーズに運びました。大会準備で多くの方のお力をお借りしたことは勿論ですが、県内のネットワークができたことも大きな成果でした。

大会のテーマは、「女性・家族・ジェンダーとアディクション看護学」と致しました。第1回から第11回の大会までのテーマは、



刀根 洋子大会長
(目白大学看護学部教授)

アディクション看護学とは何か、アディクション社会とは、アディクションと家族、アディクション看護学のエビデンス、機能不全家族について等々、歴代の大会長が工夫を凝らして開催されてきたアディクション看護学の追及でした。今回は、アディクションに深く関わる人間関係の原初的問題である母子関係や他者との関係、基本的信頼と依存などのテーマを主軸におき、性差をこえるジェンダーの問題にも視点を向け、

アディクション社会を生きる人々のところを見つめる機会にしたいと思いました。

大会テーマが領域横断的な要素が含まれ少し広がったせい、アディクション関連、精神看護学の仕事をしている会員はもとより、初めて参加された方も多く見受けられ、従来の領域を超えて母性看護学や女性を対象とした臨床家や研究者に来場していただいたようです。

[第1日目の特別講演]では、筑波大学 齋藤 環先生に「母は娘の人生を支配する」というテーマで、母娘関係の問題についてご講演をいただきました。先生は不登校やアディクション問題の治療に携わる精神科医であるとともに、サブカルチャーや社会問題にも発言される事が多く、知名度も高く会場には多くの聴講者が集まりました。



講演の内容は、母と娘の関係の困難性の根源について、「それは、『母による娘の支配』であり、その最大の要因が女性の持つ『身体性』である。母と娘は同一の身体を持つがゆえに『完全なる支配』が可能となるのである。精神分析的に考えるならば、

『女性性』とはすなわち身体性のことであり『女性らしさ』とは服装や仕草をも含む身体性への配慮である…等々。性別、身

体性、ジェンダーの問題についてわかりやすく論理的な説明に会場からは、女性のみならず、深く頷く人の姿がありました。女性特有のアディクション問題について、その見方、解決の一つの方法に示唆を頂いた講演は、大会テーマとまさに直結する内容であったと思います。



齋藤 環先生(筑波大学)と
刀根洋子大会長

[2日目の教育講演]では、臨床心理士の原田隆之先生に依存症の認知行動療法として「依存症の新しい治療法リラプス・プリベンション」について紹介して頂きました。



原田隆之先生(目白大学)

[シンポジウム]では、家族会の皆様

による「家族のリカバリートークー私たちは何を体験したかー」を行いました。本学会の第1回から企画されている当事者・家族の参加ですが、今回も当事者と専門家の壁を越えて熱い討論が交わされていました。また、交流集会では、今回初めて、大学病院の周産期センターのメンバーがプレゼンターとして、妊娠出産や女性医療の問題について、報告をして頂きました。



バイオリニスト齋川和子氏
懇親会での素晴らし演奏に拍手

大会テーマを縦糸に、講演、シンポジウム、交流集会、公開講座、研究発表が横糸として様々な模様を描いた2日間でした。

最後に、**[大会長講演]「母性・家族・ジェンダーとアディクション看護学」**についてまとめてみます。

女性のアディクション問題も広がってきています。自傷行為、摂食障害、女性としての成熟への不安、母親と娘の間に葛藤を引き起こす依存関係である母娘の問題、性依存、成功不安(女性の場合、課題の達成や職業

的成功によって周囲から女性らしくないと評されることを避ける傾向)、良い母にならない、子ども虐待、ドメスティックバイオレンス(DV)、家族との共依存など、さまざまなアディクション問題を抱える女性たちを理解する重要な手がかりとして“母性”や“ジェンダー”の問題があり、無意識に行われているジェンダーバイアスに敏感であることが求められていると考えています。「女性として生きる困難性」について云えば、母親であることは、女性の生涯発達の大きな課題であり他者が容易に承認できる達成課題である。しかし、女性の価値観や社会は変化しており、子どもの為のみ生きる伝統的母性観は揺らいできています。

E・Badinterの云う、「理想的な母親でありたい vs 自己愛的で自己中心的な衝動、与えると同時に多くを受け取ることの葛藤が今ほど深刻になったことはない」は、“母親という準備された課題を乗り越えることの難しさ”、“母という重荷”は現代の女性の多様な生き方の選択の中で、揺れる母親像を如実に表していると考えます。女性の困難性や生きづらさについては、まず、身体性とジェンダーについて触れなければなりません。

女性の身体性の特徴として、性ホルモンの変動(産後うつや更年期うつ)、季節や時差の影響を受けやすい、薬物代謝も男性とは異なるなどがあり、ジェンダーとして、性別役割や安定した人間関係を求める傾向があるが、これらはアーチファクト

(artifacts)に過ぎない?という説もあります。なぜならば、女性は援助を求める傾向、共感し受け入れることを求められてきたか

らではないか、遺伝子レベルでの性差は認められていないからです。



医療現場では母性やジェンダーはどのように扱われているのでしょうか。「母性観」は、社会文化的要素を強く反映しますが、無償の愛といった肯定的なイメージをもつことが多く、理想像の母性を妊産婦や褥婦に求める傾向があると思っています。だから、妊婦や母親たちの未熟さや「母親らしくなさ」に苛立ちを感じたり、職業的ジレンマを感じる場合があります。やはり、私たちは「良い母」を暗黙のうちに期待し要求していないでしょうか。

では、周産期のアディクション問題とは何かについて述べてみます。妊婦については、DVとしてパートナーからの暴力行為の結果、未熟児出産や流産、低体重児の出産などが知られています。胎児側から見ると、妊婦のアルコール摂取による胎児性アルコール症候群（FAS）は、奇形や知的障害をおこすことが知られています。喫煙は、血管系に影響を及ぼし、胎盤の異常、破水や早産とそれによる低出生体重児、周産期死亡、乳児突然死症候群などがあります。また、嗜好品としてのカフェイン摂取は（コーヒー・緑茶・紅茶など）、胎盤を通過し、流産・死産との関連が疑われています。アルコール、タバコ、嗜好品は生活習慣であるが薬物

依存の状態ということができます。これらは胎児環境として知られていたことですが、妊婦の依存症や胎児への虐待という見方ができると考えます。加えて、未受診妊婦、飛び込み出産や妊婦体重増加不良（極端な体重コントロール・ダイエット）なども新しい問題として出てきています。

これらの課題に解決の糸口はあるのでしょうか？一つには、ジェンダーセンシティブであることを提唱したいと思います。母性臨床では、アディクションという見方を持つことで、周産期DVや胎児・子ども虐待の発見、その背景にあるパートナーのアルコール依存やギャンブル依存などに気がつくことができます。妊娠期の過度の不安や緊張は、親への心理的葛藤や世代間伝達が潜んでいることがあります。



ジェンダーセンシティブ（ジェンダーに敏感、配慮する）なアプローチとはジェンダーが及ぼしている影響に配慮し、援助対象の問題をとらえることをいいます。女性が多数を占める看護職にとって、自らのジェンダーを意識する（gender sensitive）ことと、援助対象のジェンダー平等を意識することが求められているといえるでしょう。

以上、12回大会について簡単に報告しました。最後に、準備から当日の運営までご助力頂いた皆様に感謝申し上げます。

～「American Psychiatric Nurses Association (APNA) 27th Annual Conference」～

アメリカで活躍中している高度実践看護師が集合
日程：2013年10月9日（水）～12日（土）、場
所：米国テキサス州アントニオで開催でした。
美し街並みでした。



A large board displaying the conference schedule for the 27th Annual Conference & Career Expo. The board is divided into four columns representing the days: Wednesday, Thursday, Friday, and Saturday. Each column lists various sessions, speakers, and times.

Conference スケジュール



会場には、アメリカの歴史が展示されていました



カーボーイ像



先住民インディアン像

開会式では、学会会長 Beth Phoenix博士、UCSF
臨床教授、精神科CNSが「from japan」と紹介して
下さいました。毎年、日本からの参加者が多くな
っています。



APNA 学会会長 Beth Phoenix 博士
UCSF 臨床教授 精神科 CNS

来年は「APNA 28th Annual Conference、
October 22-25, 2014 JW Marriott
Indianapolis Indianapolis, IN」

(荒木)

～寄り道しました～

ジョンソン宇宙センター (Lyndon B. Johnson Space Center, 略: JSC) アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンに行ってきました。アポロ計画のロケットを見学し、若狭さんと記念撮影してきました。(荒木)



ロケット展示ブース



宇宙飛行士勧誘ポスター



ポスターの若狭さんと記念撮影

《編集後記》

日本アディクション看護学会第12回学術集会懇親会は、バイオリニストの生演奏が企画されました。全国から参加した会員のところが和みました。(荒木)

第13回日本アディクション看護学会 URL <http://www.fujita-hu.ac.jp/~13addict/>

《事務局からお知らせ》

入会申し込み・学会費未納の方は、振込用紙をホームページからダウンロードしてご使用ください。

<http://plaza.umin.ac.jp/~jaddictn/>

【事務局所在地】〒350-1241

埼玉県日高市山根 1397-1

埼玉医科大学 保健医療学部

精神看護学教室

日本アディクション看護学会事務局

TEL 080-2594-7911 (事務局直通)

FAX 049-295-2760

【事務局 e-mail】

jssan@saitama-med.ac.jp

日本アディクション看護学会補助機関誌

ニュース・レター 第22号

発行：平成25年12月20日

編集長：荒木 とも子

発行者：丸山 昭子

日本アディクション看護学会事務局